道行き見えないトリッパー

ガビアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道行き見えないトリッパー

【Ｎコード】
Ｎ７８３４Ｘ

【作者名】
ガビアル

【あらすじ】
大層な必要性も、必然性もなく、リリカル世界に厨二容姿で混入してしまった主人公の一人称練習作品です。ＴＳ要素有りなので苦手な方はご注意下さい。

飛んでも平気なプロローグ（前書き）

初めまして。つたない拙作をご覧頂きましてありがとうございます。

皆様の小説を読んでいるうちに妄想止みがたく、書きつづっております。

誤字脱字など注意いただければ幸いです。

飛んでも平気なプロローグ

声が聞こえる。

「起き――ください、誰もが垂涎のトリップイベ――がやって――――たよ！」

眠い。

買い換えたばかりの羽毛布団の暖かさに包まれながら俺はみじろぎをした。

そういえば昨日は徹夜の仕込みだった。眠いのも当……然……

「……ああもう！　起――てーっ！」

……騒がしい。

布団を頭に被る。……静かになった。今日は祭りでもあったっけ……さわが……

「……これは――――てしまいましょうか……あー、ええと、駄目で――。職分ですし全う――とですね」

ゆさゆさと揺れる。揺れる。揺れる。ゆれゆらゆら。じしん？

「……うほ？」

「新感覚な寝ぼけ言葉なのです……いいですか？　まずあなたはトリップすること――りました。何か――があれば聞き入れ――とも――ます」

「……少女のこえが……とりっぷ？」

……とりっぷ……どりっぷ？　とら……ぷ？　とりっくおあとりーと……

「少女――ね？　ああ！？　話し――る間にま――が！　も、もう――ったら仕――りません。望――言ってください！」

「んー……羽毛最高、このままねかせ……」

「羽毛……羽――ね。　容姿は適――トリッ――の皆様が望むよ――ものにしておき――」

何か聞こえる。なんかまあ。

「……すきに……して。ね……む」

「――良い――を！」

ぼーっと布団の温もりの中で、夢見てるなーなんて夢の中で思いながら、俺はまた眠りについた。

◇

目覚めは首筋をなでる冷たい感覚だった。

「……んあ？」

妙に細い声が聞こえる。それよりこの冷たいのは？

起きてみ……ようとして体が固まった。

冷たいものはどうも生き物だったらしく動いている。首筋を這いずりまわっている。

気持ち悪いのだが、どうも寝起きにこんなドッキリやられると驚きで固まってしまうようで、いや思考はどうもさっきから回るのだけど、なんなんだこれ。なんなんだこれ。カメラはどこだ、氷で撫

で回してくれてる奴はどこだ？　うわ動いてる動いてる、蛇か蛇なのか？　蛇っぽいって！

「っヴぉうぁっ！」

我ながらどうかと思う奇声をあげながら、慌てて布団から飛び出し、首に巻きついてるものを引き剥がして投げつける。
木にべちっと当たってその３０センチほどの蛇はカサカサと慌てて茂みに逃げ込んだ。

「……お、お、驚ぇたー……て……あ？」

ぜーはー荒げた息を落ち着ける暇もない。
何せ見ている目の前の光景が光景だ。

「……森？」

そりゃもう立派な森だった。
樫、ブナ、楢。人の手があまり入っていないのだろう雑木がひしめき、ツタが絡まりあっている。
振り返って後ろを見てみる。

「布団だな」

さっき慌てて飛び出したせいかぐしゃぐしゃになった布団がある。
それは別段おかしくない。
地面の上に直敷きしてあるのを除けば。
その向こうに１０ｍほどの澄んだ池があって、そこから手前は花が咲き乱れ、ザ・草原と言った感じののどかな風景になっているのを除けば。

先ほどまで変な夢を見ていたことを思い出す。

「また夢か？」

夢を夢と認識できるのって明晰夢というのだったか。

初めて見たかもしれない。しかし、蛇で目覚める明晰夢って、夢占いにかけたらエラい酷い結果が出そうだ。

なんとなく、池の方に歩いてみる。

物語だと池の中から美人が出てきたりとか、未来の知識を映したりとかかな？

だが、覗き込んでみると、映し出されたのは。

「なんだこの子供……」

見たことない子供だった。

俺が右手を上げるとその子供は左手を上げる。

俺が左手であいーんのポーズをとれば、その子供は右手であいーんをした。

……いや夢なんだから百歩譲って子供になるのはいい。回帰の欲求なんて誰にでもあるし。

でもこの姿はねぇよ。

「アルビノ銀髪オッドアイとか……」

こんな欲求が俺にあったのかー。厨二なのかー。中学の時に発症しなかったのが悪かったのかー。

少し逃避気味な思考が揺れる。

この調子だと邪気眼とか隠された人格とか黒翼の堕天使とかそういうのまで搭載されて……と、翼とか思い浮かべた時だった。

「ぶぷっ……おぅふ……息ぐる……し……ぐぁぁ」

寝巻きに着てたジャージの背中がなんだかもこもこって動いて盛り上がって、てか狭い。狭い！　必然首が絞まって、締まる締まる締まる。ぐぉぉぉ……

限界点に突破しようという時、びりべりばりばりと、ジャージの背中が破けはじめ。なんと翼が……

「生えた……」

なにそれ怖い。

色は真っ白でもふもふ具合はなかなか良さそうだが、いや漆黒の堕天使とかにならずに済んで良かった……のか？　え？　えー？

いやなんだろうこれは。

うん。明日聞いてみよう夢占い。

こんなカオスな夢は何というかすごすぎる。

いい年した男がとか、ふっと思ったが、いやコレだけの夢だと十分話しのネタになる。

ひとまずこれからすべきことは。

「寝るべ……」

いそいそと布団を直し、もぐりこむ。

固く眼をつむり布団を頭から被る。

翼が邪魔になるようなので横向きに体を丸めて。

なんだか……いろいろなんだか……夢でも脳は疲れてたのかもしれない。

きっとそうだ、新作メニューの仕込みで徹夜なんかするからこんな夢を見るんだな。

何も考えたくなかっただけかもしれないが。今度こそちゃんと真

っ当に現実に目を覚ましますようにと祈る。
急速にぼんやりしてきて……意識を手放した。

一話

今日は本当に酷い夢を見た。
寝ぼけて誰かに応対しちゃったなーと思ったら、草原で目覚めて、自分がどこかの厨二小説などでよく見かけるような特徴を兼ね備えたりしていて。
あまつさえ翼とかもこもこと元気に生えて、なにこのキメラ。いや天使ってよく考えたら人と鳥のキメラだよねとか思ったり思わなかったりした。
――そんな夢を見たのさ。

「で、終わりになればよかったのに」

そんな夢、いや悪夢は際限なく、容赦なく、否応もなく続行中だった。
流石にあれだけ寝たらもう寝ることも出来ない。
恐らく今は昼。
なんたって太陽がいい具合に有頂天。俺の心も温かく照らしてくれればいいのに。
ため息が先ほどから連続して出ています。
なぜため息がでるかというと先ほどから嫌な予感がするわけで。
それは股間でむずむずしてるわけで。
いやただの尿意なんですけどね。
とてつもなく嫌な予感しかしない。

「そうだ、小便行こう」

京都行こうみたいなノリであえて軽く逝ってみる。誤字ではない。
これは逝くが正しいのだ。

ちょっくら木陰に立って、まあ、寝巻きのジャージのままなので下ろさせてもらいます。
トランクスもちょっと下ろしてみまして、また戻して。

「見なかったことにしてぇ……」

涙が溢れた。
なんたって、長年付き添ってくれた我が相棒が。マイ・サンが。愛すべきエッフェル塔が。ビッグダディが。ごめん嘘ついたビッグって程じゃない。

「……無ぁい……」

へそまで届くようなご立派なもんじゃなかったけど。
毎朝自己主張してくれて、時にはちょっと困ったちゃんだった愛息。その姿が影も形も。
小さくなってたとか、しぼんでるとか腹の中に納まるという空手の奥義とかでなく。見事に玉も無い。
明日のジョーが灰になるような心境。
俺は灰になるという感覚を生まれて初めてその身に刻んだ。

◇

思考停止とは便利な言葉だと思う。
応用範囲も広く、例えば誰もが考えてなかった事なのに、いざ政治家がそれで間違えればだれそれは思考停止に陥っていたことを反省しなければ云々なんぞと叩かれたりもする。
ただ時には、精神的に追い詰まっている時などにはこの思考停止というものは切実に必要となるものらしい。
性転換とかなんかクレバスがあったとかそんなんは思考のダムに

止めて考えないことにした。考えないったら考えない。
なんで、とか、どうして、とかは時間のある時にゆっくりゲームでもしながら考えればいいことだ。

『まず、もしもという時は状況に適した優先順位を付けて判断することだ』

そんな台詞を迷彩服を着ながら俺に語った親父を思い出す。
別にアフガン帰りの軍人とかベトナム帰りのグリーンベレーとかではなく、至って普通のサバゲーマニアである。
だが、マニアというものはこだわりも大きいのか、思い出すと、どこの軍事教練だよという知識もある。

「ひとまず目先のことを考えよう。それがいい、それに決めた」

本当に思考停止とはありがたい。
何しろぽんと投げ出された五里霧中。何がどうしてどうなったという脈絡もなく、順序もなく、訳が判らない状態だ。……この場合の優先順位はというと、自己診断、状況把握だろうか。
気を取り直して、後方の静穏という名前が付きそうな池に向かう。
上流から流れ込んでいる小さな川がせき止められて直径１０ｍほどの池のようなものになっているようだ。岩がごろごろあるわけでもないので、それほど渓流というわけでもないようだが。
水に触ってみるとかなりの冷水であることが判る。近いところに湧き水の源流があるせいなのだろう。
水面に映るアレな姿を見てため息を落とすも、いつまでもじっとしているわけにも行かないので、勢いよく水面に顔をつける。

「……ぷぁー冷てぇ」

いい感じにすっきりしてきた。
拭くものもないので、破れたジャージの上着で拭う。化繊は水の吸いが悪いがこの際仕方ない。

「さぁて、まずは……」

自己診断。これはあまり考えたくないが、否定しても仕方ない。この、明らかに日本人らしからぬスラブ系というか、ロシア人と言われて思い描く典型のような顔立ちで、銀髪オッドアイの痛い容姿の人物は俺ということらしい。
髪の長さはあまり変わってない。耳が隠れるか隠れない程度のショートで、割とざんばらりんと切ってある。
色はもう笑うしかないようなプラチナブロンド。さらさらの直毛である。アーモンド型の大きな目に高くて通った鼻梁。色白というか色素ねえだろというくらいの白い肌。血の色が透けて見えるので冷水で刺激受けた頬は今ピンク色だが。うわぁ。
くじけるな俺。イタくてもくじけるな。がんばれ、やればできる。俺はできる子だ。自己暗示をかけて再起動する。
目は左目が琥珀、右目が青。金目銀目という奴のようだ。瞬きを二回。水面に映る姿も瞬きを二回。睫長い。爪楊枝8本乗せがいけそうな感じである。
いやまぁ、そこまでは人間の範疇だ。それはいい。よくはないけどいい。
背中の感触が問題だ。この至って普通に生えてる翼。なんだろうか、背中に腕でもついているかのような。天津飯の四妖拳、背中に腕が生えて手数が増える技だったか。そんなのを思い出す。
腕とは大分関節の付き方が違うが、何というか、当たり前に普通に動かすことができる。手の平をパーにするような感覚で翼がばさーと開いたり。ぐっとすると折り畳めるとでも言えばいいのか。……いかん、ぐっとしすぎたら攣った……うぉお、痛ぇ……ぴくぴく

する羽根が微妙な気持ちを増幅する。
……どうしようか、大分人間辞めてしまっている気がする。この上さらに額に目でも出来たら、目も当てられない。というか人目に当たりたくない。幻想郷とでも立て札に書いて山に引き篭もるしかない。
落ち着こう、落ち着こう。深呼吸を数回して強引に落ち着く。
ともあれ、この羽根の長さは目一杯広げると片羽根で２メートルくらいか、そのくらいまでは広がる。両方広げれば、俺は体長４メートルの霊長類ということになる。いや、羽根生えてるから鳥類なのか？　混ざって霊鳥類？　やめよう。なんだかＣＯＭＰとか持ってる人に使役されそうだ。コンゴトモヨロシクとか言う気はない。
そして、体を動かすのにまるきり違和感がなかったので気付かなかったのだが。……縮んでいる。洗濯機にかけられたニットのセーターのように縮んでいる。具体的には三分の二くらいに小さく。今の身長は１２０センチと言ったところだろうか。手足の長さも短く、手の平に至っては何というプニ具合。マシュマロと勝負が張れそうだった。……何というか子供にしか見えない。いや認めよう、今の俺は子供の体であると。認めざるを得ない。よし、自己診断はひとまずこれで……。
と、そこまでが俺の限界だった。

「ありえん……ありえん……」

頭をかかえてうずくまる。
夢だろ醒めろ醒めろ醒めろ。

「うぁー……」

そんな自己診断にも思考停止という名の蓋をして、のろのろと立ち上がる。

今の俺を誰かが見れば、レイプ目というものを拝めたかもしれなかった。

「まあ、なんだ……状況、把握せんと……」

既にグロッキーです。

ギブアップボタンかナースコールがあれば連打していると思う。リングにタオル投げていいならセコンドに百本はタオル投げさせてる。と言っても、いつまでこの状態でも仕方ないので。

大きく息を吸って吐く。頬に両手でビンタで気合を入れ。

「……痛ぅぁ！」

思ったより力があった。というか歯で口の中を切ってしまった。ひりひりするが、これはこれで気が紛れたので良しとする。

まずやる事は……

あたりを一通り探索した、あまり詳しいわけでないが、植生、また、木に付いている獣毛をチェック、危険な動物がいないかを確認する。一応熊避けに一定感覚で音を鳴らしている。

円を書くように池の周囲を軽く探索した後は、歩きやすそうな、木々の隙間の多い場所を縫って、放射状に探索をする。

迷わないように石でサインを残しながら木々の間を歩いていく。

『森歩きは急いではならない。落ち葉に隠れて穴があるなどはよくある事だ、大雑把な■の事だ。注意しろよ』ふとまた、変人親父殿の台詞を思い出す。大雑把は自分だろうに、よく俺の事をそうけなしていたものだ。

……確かに、連絡手段もない今、怪我をしたら笑い話にもならない。ゆっくり着実に歩みを進める。――1時間も歩いた頃だろうか。唐突に森を抜けた。

「……おおぅ」

感嘆が出てきてしまった。

森を抜けたと思ったら切り立った小高い崖になっていた。

クライマーでもないので降りられる自信はないのだが、そこから見渡せる風景こそが有りがたいものだった。

街である。

距離は１０キロメートル程だろうか。昼間というのに車も行き交い、それなりに活気のありそうな雰囲気である。中心部と言えそうな所にはビルが立ち並び、俺から見て左側は緩やかな湾となって、海に面した公園や、倉庫街が広がっているようだった。

港湾都市と言えばいいのだろうか、ひとまず、おおまかな方角だけ確かめ、別ルートで近づいてみる事にする。

太陽が出てるうちなら、おおまかな方角だけは判る。

日が暮れる前には街に着きたいな、と疲れる足を持ち上げてまたゆっくり歩きはじめた。

◇

「ついた……」

やっと森の切れ目というか、人里につながる道路が見えた。人家も見える。

どうやら山間の住宅街のような所に出たらしい。

途中で拾った手頃な木の枝を杖にして、ぐてーっとへたりこむ。

空を見ると既に夕方。

木苺とか見かける度にちょこちょこ食っていたものの、流石に腹も減る。カロリーが足りない。

とはいえ、疲れているのは精神的な部分らしく、体は妙なことにあまり疲労を感じていなかったりする。３時間以上も道無き道を山

歩きすれば成人男性でも鍛えてない限り疲れは感じると思うのだが。
そのあたりの感覚の違いというのがまた少々気持ち悪い。脳が体の動かし方を理解していないような気さえする。……考えるどつぼにはまりそうなので、これも考えないことにするのだが。

「さて、とりあえず交番にで……も……？」

俺は自分の今の容姿を思い出して頭を抱えた。

「どこの世界に羽根生やした子供がいるんだよ……身分証明だって出来ねぇし、前とは見た目も全く違うし……」

住所不明、戸籍不明、世界に類を見ない類の奇形を持った、保護者もいない子供である。
最悪の場合、闇社会で流通ルートとか、どこのバッドエンドですか。
悪い方向に考えるとキリがない。
ただ、この見た目で目立ちたくもないし、人目を忍んで家族に連絡、かね？
何しろ格好も普通に恥ずかしいのである。
羽根出す時に、上着は破れて、背中で結んでいる状態。
泥で汚れたジャージに、靴など当然ないので泥だらけの靴下。
背中から生えてる白い羽根。
どこの違法研究所から逃げ出してきたの？　とか言われそうだ。
ライトノベルなら。
そんな事をつらつらと考えながら、意識して人家から距離をとって歩く。
時間としてはもう夕方を過ぎて、暗くなりかけている。
先ほどまでちらほらと帰宅する小学生が見えたのだが、そろそろ夕食と団欒の時間ということなのだろう。

実のところ。

「飯の臭いが漂ってきて腹が……」

今の俺の姿を見る人が見れば、ザ・ションボリというタイトルで写真撮ってくれるんじゃないだろうか。せつない。空腹時に美味そうな臭いせつない。マッチ売りの少女も確か、空腹なのに七面鳥を食べる家庭を夢見ているなんて描写があったっけ……判る、判るぞ少女よ。食いたいなぁロースト七面鳥。中はジューシー、外はカリカリ。バジルとオリーブの香りがぷーん。

「うぐぁ、とんでもないものを想像してしまった……腹減った……もう、性犯罪者のロリペド野郎でもいいから見た目に釣られて飯くれんだろうか……」

実際に襲ってきたらねじり潰すが。何をとは言わない。

自己主張を繰り返す胃袋を抑えて、人気のない公園があったので、とりあえず水で腹を満たす。日本はすばらしい、水道水が飲み放題だ。涙が出そうになっているのはきっと気のせいだ。

とりあえず水分補給したせいか、多少は余裕がでてきた。

一つ思った事があり、公園に設置されている自動販売機の下をよーく見る。普通なら懐中電灯で照らさないと見えないところだが、目をこらす。発見。そこらへんの枝で手繰り寄せる。

１０円硬貨をゲットした。１００円硬貨を２枚ゲットした。本当は届けないと遺失物横領になるのだが、非常時なので堪忍してもらう。

自分自身でよく判ってない部分も多いのだが、どうもこの子供ボディ、やたらスペックが高い。

夜目が利くわ、力強いわ、スタミナはあるわ、人の気配だの臭いにも敏感だったりする。

野生動物にでもなってしまった気分だが、羽根生えた妖怪とでも思えばおかしくないのかもしれない。妖怪……そんな事思いつく時点で段々俺の常識も壊れているようではあるが。

ともあれ、使えるものは使う。

何より、これで電話が使えるのが大きい。

というわけで早速公園の公衆電話で、硬貨投入。自宅の電話番号をプッシュプッシュ。

しかし、いまだにこの昔ながらの緑色公衆電話が残っているというのは懐かしさをそそる。

「携帯が出回ってからはめっきり見なくなったからなー」

今となればこの電話ボックスのべたべた貼られている、教育に非常に悪いピンクチラシも懐かしい。

プッシュし終えると、数秒の時間の後こう言われた。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

心臓が早鐘を打つ。

「間違えた？」

再度硬貨を入れてゆっくり口で確認しながらプッシュ。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

動悸が止まらない。なのに血の気が顔から引くのが判った。

三度、四度掛け直す。頭で番号が間違ってないか、思い出しなが

ら。
しかし、つながらない。
隣近所の……小学生の時からの幼馴染、腐れ縁といってもいいかもしれない。奴のところに電話をかける。
今度もつながらなかったらどうしようか、と少し指が震えた。
数秒待つと、電話のトルルルというコール音。
大きく息を吐いた。やがて、ガチャと音が響き相手が出る。

「はい、溝呂木です」

若い女性の声ではっきりそう言われた。

「溝呂木さん……ですか？　――でなく……」
「はい、違いますよ？　お間違えでしたか？」

すいません間違えました、と言って切ったが、声はかすれて届かなかったかもしれない。
動悸が激しくなる。
冷や汗が止まらない。
ふと目が備え付けの電話帳に留まった。
探す。
覚えている限りの近所の新聞屋の名前、工務店の名前、工場の名前、魚屋の、小さい服屋の、行きつけの喫茶の、よく買いものに行くスポーツ洋品店の、腐れ縁の友人が大好きなゲームセンターの。
一致する店が存在しなかった。
それどころか、以前住んでいた、町の名前そのものが見当たらない。
判らない。何でどうしてこうなったのかが判らない。得体の知れない恐怖がこみ上げてくる。
唯一つ判るのは。

「……はは。やべぇ……本格的にやべぇ」

人との繋がりが何一つない、本当の意味で孤独という事だった。

◇

気が付いたら、最初目を覚ました時と同じ場所に戻って来ていた。
顔はぐちゃぐちゃで涙だか汗だか鼻水だか判らない感じにグロくなってしまっているようだった。

「……ああ……あー、はぁ……」

なんだか、頭がぐらつく。池の水で顔をばしゃばしゃゆすいでとりあえずグロさを直す。
後ろを見れば俺と唯一つだけ、つながりのある布団。探索する時に枝に干しておいたものが目に止まる。
その月明かりに照らされた青白い布団が、なんともシュールで皮肉で滑稽に思われて。

「……あー、本格的に駄目だ。精神的に病んでそうだな俺ー……。ぷっ……くくッかっ……ぎゃはははは！」

笑いがこみ上げてくるなんて。
腹が痛くなるほど地面を転げまわって笑って、笑って、笑って。
真っ白な羽根がドロドロになるまで転げまわって。
発作のように止まらない笑いの衝動が収まったのは、池にダイブして一通り泳ぎまわった後だった。
魚くんたち驚かせてごめん。おいちゃんも疲れてンのさ。
冷たい水の中でぷかぷか浮かびながら月を眺める。

眺めながら考える。
なんとなく、今まで気にしててもあえて考えなかった事を考える。
「俺の名前……なんだったけかなー……」
アルファベットで3文字、漢字で1文字だったと思った。
ただ、いくら思い返しても、墨汁をたらしてふきとったかのように曖昧になってしまう。
年齢も同様だった。
気付かないようにしていた。でもここまで考えるとどうしても気付いてしまう。
記憶の中のサバゲーマニアで破天荒で適当な親父も。
インドアでドラマに一喜一憂する妙にホットケーキが上手い母も。
子供の頃からエアガンで遊んでいたらいつの間にかガンオタからアニオタへ変異していた隣の悪友も。
記憶はあるのに、思い出がない。顔も思い出せない。言葉は思い出せるのに。
水彩絵の具で描いた絵に水をぶちまけたかのようにぼかされている。
「……あー、うつだしのう」
ごぽんと池に潜ってみる。沈む、沈む。あまり深いわけじゃないが、このまま沈めば底なし沼のように飲み込んでくれないだろうか。
このボディだと水の中でも隅々まで見渡せる。
水底でザリガニが威嚇していた。指を目の前に出すと挟もうとしてくる。かわしてつつく。挟もうとする。かわしてつつく。かわしてつつく。逃げようとするので背中をキャッチ。捕まえた。
卵を大事そうに抱えている。声が出せるならしゃぎーとでも言い出しそうな感じに怒っている。

なんだか力がいろいろ抜けた。
ザリガニは手放す。
水面に顔を出して息を吸い込む。
手のように自在に動かせるようになった羽根でぱちゃぱちゃと泳ぐ。バタ足の要領だ。バタ羽根？
水から上がって羽根の水を切る。絞った上着で体を拭う。
開き直った。
そもそもそんなに深く悩むのがとても苦手な方なのだ。多分。
落ち込むだけ落ち込んだら後は寝るだけ。
ひっかけておいた布団を草の上に敷き、虫除けの松葉を周囲に散らす。
明日は早くに起きてみよう。
そんな事を思いながら、すっかり馴れた翼にくるまって、上に布団を被る。
今は涼しいようだからいいけど、夏は暑苦しいかもしれない。そんな事を思いながら意識は薄れていった。

二話

流石に三回も同じ風景を起き抜けに見てしまうと、夢オチという現実逃避も成功しない。

そんな事を思いながら目覚めた朝だった。

思い切り伸びをしてコリをほぐす。空はまだ薄暗く、朝もやがかかり、空気はひんやりとしていた。

気の早いキジがどこかでキェー、キェーと威勢のいい声をあげている。

昨日は混乱して騒いで泣いて寝て、何とか感情は落ち着いた。実は落ち着いてないけど、今は置いておき、今日やること、やるべきことを思い浮かべる。

「衣、食、住。それに情報か」

考えてみたら、昨日見た、港湾都市っぽい街の名前も確認していなかった。本当にせっぱつまってたようだ。

今自分がどの場所に居るかぐらいは確認しないと。いや、ここは本当に日本なのか。日本に良く似たパラレルワールドとかの方が余程安心する。

ただ、とりあえずの方針は決まった。まずは――

◇

前方のブロックの壁に隠れて息を殺す。

周囲からは生い茂るツツジに隠れて、この小さい身は周囲からは完全に見えなくなっているはずだ。

出勤する父親と思わしき人達に、母親と思わしき人達。それに全体的に見かける子供は幼稚園か保育園、あるいは小学生が多い。年

齢が高くても中学生といったところか。
昨日確認した住宅街は、やはり思っていた通りの家が多かったようだ。
山に近く、新築が多く、道に沿って一戸一戸の土地が整備されていた。
一つ一つの土地そのものはやたら広いというわけでもなく、恐らく都市計画で整備された分譲地なのだろう。
こういう場所は若い夫婦が集まりやすく、当然子供も多くなる。さらに小さい子供は成長が早く、衣服などはほぼ使い捨てに近い状態になってしまうことも多い。
やがて、人通りが少なくなり、全く人が居なくなったのを見計らい。俺は目当てのものをかっさらって、そのまま走り去る。
５０メートル先の森に向かい獲物を抱え、風になる。
森に飛び込み、先にマークしておいた安全地帯、――大きな木のウロがあり、隠れるのに調度良かった。ところまで行き着き、大きく息を吐いた。

「見られないでよかった……」

何せ今の自分の格好といったら、ヨレたジャージの下と、すりきれたソックス。上半身は上着というよりボロ。ついでに翼付き。こんなのが後生大事に半透明袋を抱えて全力疾走してる姿とか見られたら、なんというか……死ななくても大事なものが磨り減ってしまいそうだった。既にいろいろ遅い気もするが、せめて羞恥心だけは人並みにとっておきたかったのだ。
息を整え、さらった獲物を確認する。
そう、今日はどうやら燃えるゴミの日らしかった。
選んだ獲物はこの服がたっぷり詰まったゴミ袋。子供向けの服もそれなりに詰まっていそうだった。
ほくほくと中身を確認し、使えそうなものを選り分けていく。

――整理中、整理中、整理中。
うん……なかなかの物がゲットできた。
大人の大きさのワイシャツ、サイズが合わなくなって捨てることになったのだろう、あまり汚れもない。
普通のTシャツ3枚、子供にサイズが合わなくなったようだ。デザインが……某ネズミーのキャラ物なのがちょっとアレだが。今の身体にぴったりなのが悔しい。
それに未使用のタオルが出てきたのには驚いた。貰い物で、余ってしまったのだろうが、なんとも勿体無いものだった。ともあれ、有り難く使わせてもらうが。
嬉しかったのは運動靴か。少し大きいが、十分履ける。裏にガムが付いてたが。今の親はこのくらいでも捨ててしまうのだな。ともあれ、履物は嬉しい。今まで靴下で外歩きだから、大分足に傷も出来てしまっていた。早速ガムを枝で削り落として履かせてもらう。
……妙なものも大分出てきたというか、使用済みと強く自己主張しているかのような、何かカペカペになっているセーラー服とか大人用スクール水着とか。蝋のついた麻縄とか。うんまあ、地面に埋めて証拠隠滅しておこう。というかこういうものはせめて紙袋で隠してからゴミに出したほうがいいと思うが……うん、ゴミ泥棒が言えることじゃないな。
少々げんなりとしつつも整理を終え、ひとまずこれで身支度を整えることができそうだ。一発目のゴミ袋でこれだけの当たりというのも相当に運が良かった。衣類が調達できるまで数回は同じことを繰り返すのを覚悟していたので幸先の良さに鼻歌が出てしまいそうになる。
最早、上着というよりボロか布切れと形容しなくてはならないジャージを脱ぎ捨て、ワイシャツを羽織る。この大人サイズのワイシャツなら、翼をきっちり折り畳めば……
「……ぉうあってててててっ」

羽根が攣ってしまった。悶えながら突発的に思いついたあの台詞が何とはなしに口から出てしまった。

「ぐぅっ……白翼を持たぬものには判るまい……」

……痛みは紛らわせたものの、周囲に誰もいないというのに万が一を考えキョロキョロ見回し、一人赤面してしまった。いやホント、何言ってんのよ俺。

◇

「うし、これでよし！」

身支度を整え……ズボンに類するものは無かったので元のヨレたジャージのままだが、せめてもと、くっついた埃だのゴミクズだのを綺麗に払って、準備は完了。ぶかぶかのワイシャツで翼を隠すことも何とかできているようだ。力入れてないともこもこしてくるので、それなりに大変だが、背に腹は代えられない。

思わず走り出しそうになってしまう足を押さえながら、早足で街につながる道路に踏み出した。

向かう場所は高台から確認した総合デパート。征く戦場は地下一階食品売り場。

――さあ、試食品の貯蔵は充分か？

「……はっ！」

何か、イタい思考が混入した気がする。

身体に影響されて精神年齢が下がっているんだ。そうなんだ。絶対そうだ。理論武装は完璧だ。嘘だごめん。

頭をぶんぶん振って、とりとめのなくなった思考を追い出す。
なんだかんだで、自己主張を繰り返す胃袋には逆らえず、途中から駆け足になってしまった。
いつの間にやら目的地に到着していた。

「……はらへった……はらへった……はらへった……」

ヨダレが口から溢れそうになってしまう。
なにやら凄い顔をしていたのかもしれない。
目の合ったサービスカウンターの人に、全力で視線を逸らされた。
ああ、まあいい。そんなものは些事だ。
なにしろこちとら、ココのところまともに食べてない。
地下へ続くエスカレーターを下り、試食品と思わしき肉を焼く香りが漂う。胃袋が際限なく自己主張を繰り返し、口の中にヨダレが充満する。
俺はごくりと溜まったヨダレを飲み込み、息を整え、『食欲』という名の人間三大欲の一つを全力で解き放った。

◇

台風一過。
まさにその四字熟語がふさわしいかもしれない。
多くは語らない。ただ、一言だけ。
デパ地下の従業員さん、試食荒らしの事、本当にごめんなさい。
いずれ、金持ちになったら、この店でたっぷり散財しよう。
やっと満たされた腹を抱え、久しぶりに余裕のある気持ちで散策をする。
メインストリートというほどではないのだろうが、それなりに広い道に街路樹が植わり、ぽつぽつと散発的に小さな店が並ぶ。商店街があるとしたらその端のあたりなのだろう。腹ごなしにのんびり

散歩をするにはぴったりの場所だった。
ただ、先ほどは食に夢中だったのもあって気にしなかったのだが、道行く人がちらちらとこちらを見てくる。と言っても、犬に散歩させているお爺さんとお婆さんくらいしか見かけなかったが。
やはり目立つのだろう……白人にしても真っ白な肌に銀髪でオッドアイ。小汚い格好。俺もそんなの見かけたら驚く。
ふと思い立って、人通りの多そうな方に向かう。少し前にちらっとメインストリートっぽい通りを見かけたのだ。そこは昼前というのにそれなりに人が歩いているようだった。
自分自身がどのくらい目立つかを把握しておこうかと思っての事だった。

「う……」

呻いてしまった。その通りを歩き始めて数分にも満たない時のことだ。
どうにも視線が刺さる刺さる。以前は全くこんな経験がなかったので、一目散に逃げたい衝動が心でもたげる。
とはいえ、変な格好の外人の子が歩いてる、程度の認識で済ませてくれているらしく、一番緊張したお巡りさんの傍を通る時も、訝しげな顔をしたもののスルーしてくれた。
日本人の事なかれ主義に感謝。
ともあれ、やっと、というかようやくというか。現在地が判明した。
いや道路の案内標識に『海鳴駅２ｋｍ』と書いてあるわけで。
よくよく見れば、道路沿いの標識にも市名が書いてあるわけで。
……俺は本当に今の今まで余裕を無くしていたらしい。というか自分の間抜け具合に膝が折れそうになった。頭を抱えて振り乱したくなった。この調子だと、何か他にもあほな事やってんじゃないのかと心配になった。

と、ともあれ、次のことを考えることにする。思い悩んでも仕方ない事はあるのだ。
衣食はなんとかなったので、次は住だ。
と言ってもこれはあまり心配していない。季節柄はどうも春と夏の合間らしく、野宿も難しくないシーズンだったからというのもある。長い目で見ればどうかと思うが当座は何とでもなるだろう。
ひたすら足で探そうかとも思ったが、ふっと思いついたこともあり、前に高台から一望した時に見えた銭湯に向かう。目当ては昨日拾ったなけなしの小銭で一っ風呂……といきたい所だが違う。ああ、コーヒー牛乳が恋しい。腰に手を当て、親父飲みしたい。いや童心に帰ってイチゴ牛乳もなかなか……。
と、思考が逸れた。狙いはその高ーい煙突にある。昔ながらの銭湯の近所の子供なら一度や二度はよじ登って怒られたであろうあれだ。街の中から町並みを一望すれば、あるいは雨風のしのげそうな廃屋でも見つかるかもしれない。

◇

結果から言えば、想像の斜め上のものが見つかった。
しかし、煙突に登って見回していたら、銭湯のおっさんに見つかってしまい、こっぴどく怒られたのは置いておく。
気を取り直し、見つけたお目当ての方に向かった。
方向としては元来た方向、俺が最初から居た山林の方向だ。
山と街の中間のような場所、通りから少し外れた側道に、周囲の田園風景とはまるで場違いなようなそうでないような、こんもりとした雑木林がでんと構えていた。
周囲は錆び錆びのフェンスに囲われ、とりあえずの境界を作っている。
入り口と思わしき鉄の門には、年代ものの鎖が張られ、封鎖されている。ところどころが割れ、雑草が生い茂るアスファルトの道が

その雑木林の中に続いていた。

「放置されて、ウン十年は経ってそうだな……こりゃ」

おじゃましまーすと小声で呟いて、１メートル少々の高さの門を飛び越える。

もはや山道と言ってもおかしくないようなボロボロの道を歩く事５分。ちょこちょこ曲がりながら、３００メートルも道なりに歩いた頃だったろうか。建物が見えてくる。

「……到着ーと。しかしこりゃまた……雰囲気のあることで」

思わず一人ごちてしまう。これは無理もないと思う。じゃりじゃり音を立てながら見て回る、靴を拾えて本当によかった。

塗装も落ち、虫食いのように穴が開いているトタン屋根。劣化してめくれ上がっている外装。ところどころで剥げ落ちて鉄筋しか残っていない場所すらある。

窓ガラスがかろうじて残っているのが奇跡のようなものか。床には落剥した破片だのなんだのとわからないものがビスケットのカスのように散らばっている。

最近流行りになっているらしい、廃墟巡りのコミュニティサイトに投稿したくなるような、立派な廃工場だった。

工場そのものの敷地も相当広く、かつては相当大口の仕事もしていたのだろう事は想像できる。今は工場の中身はがらんどうなので、どういった業種かは定かではないが。

ともあれ。

「あてが外れた……」

ちょっと落胆する。遠目で見た限りではそれなりにボロくも屋根、

壁が見えたので、雨風はしのげるとは思っていたのだが。間近に来て見ると劣化が酷い。
これは、雨でも降ってきたら、神社の軒下でも借りるか？　いや、考えてみたらこの子供ボディなら泣き落としで泊めてもらえるんじゃね？　泣き落としとか正直ないな、却下。
などと、益体も無い事をつらつらと考えながらも、工場の探索を続ける。
と言ってもそう複雑な作りになっているわけでもなく、何のひねりもない箱型の建屋なのでそう見るところもないのだが。
外に出て、ぐるっと周ってみると、どうも最初に見えた一番大きい建屋だけではなく並行して二の字を描くように工場建屋が並んでいるようだった。
だが、さらにその奥にある小さな建物に目を惹かれる。
もしかしたら、工場の事務所あるいは休憩所として使われていたのかもしれない、工場の建屋より随分手のかかってそうな小屋がそっくり残されていた。
あてが外れたなんて言ってごめん。これは大当たりだったかもしれない。
入り口の戸はさすがに体を成さずに外に倒れこんでいるものの、おもむろに覗き込んでみれば、６畳ほどの土間……というかコンクリートが打ちっぱなしになっているだけだが、その中央に昔のダルマストーブが鎮座し、壁際には食器棚らしきものが置かれ、その近くに木製の椅子が無造作に積み重ねてある。
土間の奥には板張りの床になっている部分が４畳ほど。仮眠用のスペースのようだ。
うん。間違いなくこの工場の休憩所だったようだ。小さい作りのためか、屋根のトタンも幸い目立つ穴は開いていない。壁にいたっては、憩いの施設だけはと奮発したのか、鉄筋コンクリート作りの上に板を張っている。
ともあれ、これで住の問題もなんとか目処が立ちそうだった。不

法侵入には申し訳ないが目をつぶってもらうとしよう。元々が放置されてる物件でもあることだし。
そして、ねぐらが決まれば、やるべき事はいくつも思い浮かぶ。
「まずは掃除……だなぁー」
コンクリートの床に積もった凄まじい埃をうかつに散らしてしまい、むずむずする鼻を押さえて呟いた。
工場に掃除に使えそうなもんでも落ちてるといいんだが……
いざとなれば、箒はそこらの枝でも束ねればいいし、雑巾は朝拾ったゴミの中から使えそうにもない服を使えばいい。
昨日とは一転して上機嫌な自分に苦笑が出そうになる。いや、でた。
「くふふ」
思ったより気持ち悪い含み笑いだった。
どうやら俺はトム・ソーヤーかロビンソン・クルーソーの真似でもしていれば、こんな訳の判らない状況でも楽しめるらしい。
全くもって現金な事この上なかった。

三話

運良くねぐらを確保できてからは、掃除したり、痛んだ部分を修理したりで瞬く間に二日が過ぎた。

それなりに状態が良かったと言っても、元が廃屋なのには違いないので、手がかかることかかること。それなりにお金があればきっちり修理してやりたいのだが、今は廃工場に転がっている雑多なものを組み合わせてなんとかやりくりしている。

例えば、錆びて穴が空きはじめている天井には工場の建屋で落っこちていた丁度いいトタンの破片を上から張り合わせている。接着剤はあちこちで使われていた樹脂を煮溶かしたものだ。

窓も一応あるにはあるが、窓ガラスが全損の状態だったので、これも工場内のまだ無事だった窓を移植。サイズが合わなかったので打ち付けてしまった。枠が木枠だと加工が楽でいい。

床板はかなり朽ちていたので、全て剥がし、コンクリートの地肌がむき出しになっている。今は拾ってきたダンボールを数枚敷いているが、いずれ無事そうな板材でも見つけたら張るのもいいかもしれない。

工場でもかなりの掘り出しものが見つかった。工具箱がそのまま見つかり、開けてみれば、酷い錆びの生えた工具もあったものの、それなりに使えるレベルのものもあった。例えば今、頑張って研磨している小刀もその一つだ。幸い、砥石も普通に見つかったのでこうして研いでいるのだが、ここまで錆び錆びだったものを実用レベルまでするというのもなかなか手間の要ることではある。

一時間ほども費やし、それなりに研がれた小刀を懐に入れ、食料調達に行くことにした。

近場のデパートはここのところ試食品を散々荒らしてしまったので、さすがに行きにくい。というかそろそろ目をつけられているようなのだ。と言ってもあからさまに怪しい子供なので、目をつけら

れないはずもないとは思うが。そんなわけで今日は野で食料調達なのだ。

◇

オラオラオラオラオラオラ！

ラッシュを叩き込む。その陽光照り返す水面に向かい、ひたすら、殴る、殴る、殴る。

君が！　泣くまで！　殴るのを止めない！

そのくらいハイテンションで暴れるのが効率がいいのだ。この漁は。誰かがこの姿を見ればなんて考えない。考えないったら考えない。

川の上流からそうやって暴れながら下流にゆっくり移動していけば、魚が追い立てられ、前もって石でせき止められているので、唯一の逃げ場所には網。

追い立て漁と言われるやり方だ。ちなみに網はなけなしの拾った硬貨で買ったダイ〇ーの洗濯ネットである。洗濯機の中で盛大に回されるのが前提の作りなので丈夫さは信用がおけるのだ。

追い込み終わって、網を回収してみるとなかなかの成果だった。知識だけで、やってみるのは初めてだったが上手くいったようだ。

「んー、ヤマメ、ハヤ……おお、こりゃカジカか。ニジマス多いな、放流でもした後だったか？」

あの最初に見た池の上流がこんなにいい感じに漁場になっていたというのは有り難いと同時に思わぬ誤算でもあった。

こういったいい感じの漁場はすでに漁協で管理されていて、今やっているようなことは露骨に漁場荒らしなのである。地元の漁業関係者さん、ごめんなさい。……うんまあ、見つかったら逃げるか。遊漁料払えないし。

とりあえず、まだ育っていない魚は放して、それなりの大きさの魚だけ頂くとしよう。
魚は内蔵から傷むので、ワタとエラをその場で抜いて、熊笹でくるむ。
ついでに、川辺に生えているクレソンと行きがけに目についたマダケの筍を摘んで帰る。……コゴミも発見。いやはやいい時期だ。む……あれは、ウドか。ゲットゲット。
ここでも洗濯ネット大活躍である。袋代わりに丁度いいのだ。食材が蒸れないし。
一通り山の幸を収穫し、ほくほくと帰宅したのだが。

「塩買えばよかった……」

調味料がないことを思い出し、地に手をついてうなだれていた。がっくりである。
あの漁法を思い出したとはいえ、なんで洗濯ネット……いや、これはこれで今日は大活躍だったんだが……

「うぅ……俺の馬鹿……」

外を見れば、真っ赤に空が焼けていた。
見事なまでの夕焼けを背景に、カラスがカアカアと鳴いている。
それがまた馬鹿にされているようで、石を投げてやったが。今の境遇にはシャクに触る歌も思い出してしまったし。

「夕焼け小焼けでまたあしたー、まーたあーしーた一ってか、ああ全く」

おいしい　おやつに　ほかほかごはんが待ってたらそりゃ帰りたいわなぁ。

口に出したら何か負けるような気がして、考えるだけにとどめた。
とりあえず、味無しでも腹ごしらえをしよう、街に出ることにしよう。夜になればこの浮浪児姿も目立たないだろうし。
ぼりぼりと頭をかいて一つため息をつく。気を取り直して、家の外に作った即席のかまどに火を起こすことにした。

◇

「おう、また見っけ」

今晩はそれに専念しているせいか、以前よりはるかに発見率が高い。
前傾姿勢をとり、目を爛々とさせ、小さな小さな輝きさえも見逃さない。
まさにハンターの心持ちである。
やってる事が小銭拾いでなければ、それなりにサマになっていたかもしれない。
若干人としての悲しみを感じつつも小銭の輝きは見逃さない。
しかし、この視線の低さと高スペック視力があってのものかもしれないが、探してみると小銭ってのはかなり落ちてるものではある。
絶対に人には見られたくないので、夜を待って出陣すること3時間。総計すると１０００円程も見つかってしまった。すごい。
これだけ虱潰しに探すとしばらくこの一帯は小銭はないだろうけど。
拾得してばかりでは何なので、ゴミ拾いも兼ねている。美化運動である。ホームレスのおっさんの行動と変わらない気もするが、ホームレスという単語で精神的に落ち込みそうな気がしたので考えない事にする。

「ぐーむ……」

背中を伸ばす。首を回す。上半身をひねってみる。背中をまくって翼を伸ばしてみる。どうもこういう時にコキコキ鳴ってくれないと柔軟したという気分にならないのはまだ以前の感覚を引きずっているせいか。ともあれ、前傾でいるのもいい加減疲れたので背筋を伸ばす。

小さな住宅地によくある公園、街灯がぼんやりとベンチを照らしている。公園の据え付け時計を見ればすでに１２時。よい子はとっくに寝る時間だった。とても悪い子なので寝ないけど。うん、自分で悪い子とか考えて少し気持ち悪くなった。水道でうがい。水分補給、ついでに顔を洗っておく。

意識がしゃっきりしたところで、街灯の下で今晩の拾得物の確認をする。

拾うのは小銭だけではなく、何かの役に立ちそうなものは拾っている。カッターだの、ボールペンだの、安全ピンだの、空のペットボトルだの。何かに使えそうなものは片っ端といってもいいかもしれない。

ついでなので、ペットボトルをよく水洗いしてから、水を入れて持ち帰る。水場が近くにないので少々手間だが仕方ない。それに近くにないと言っても歩いて２０分の距離なのだ。中国奥深くの、毎朝水くみに崖沿いで何キロも歩くような環境に比べればずっとマシというものだ。比べる対象が間違っている気もするが。

しかし、この後どうするか……

今日、どうするかではない。

少ないながらも小銭を得ることができたので、あと同じことを二、三回繰り返せば１００円ショップなどを利用しながら、なんとか生きることはできそうだ。ただし、その先。

まるでビジョンが見えてこない。

いっその事、この反則的な身体能力でオリンピックでも目指すか？　いや、翼とか生えてたら問題になりすぎるだろう。

「あるいは切っちまうか？」

一瞬そんな気になったものの、さすがにそれは気が早すぎるように思える。というか医者行ったら絶対サンプリングとられる。こんな稀少すぎる例はないだろう。下手すれば、いつの間にか行方不明とかドラマによくある展開なんてのも……

いや、それはないと思ったものの、大小実験データの作成には「ご協力」させられそうではある。……えーと、うん。先延ばしかもしれないが、やはり人にこれを知られるのはアウトだな。

はー、とため息を一つ落とし、ねぐらに戻ることにした。

人の気配を気にしながら、夜中の散歩。妖怪にでもなった気分だ。

「お化けにゃ学校も、試験も何にもないってかー」

ついでに仕事もない。さらには多分戸籍もない。いずれは妖怪らしく、人の驚かせ方も勉強しておいたほうがいいのかもしれない。幸い、あの廃工場はいかにも何か出てきそうでもあるし。

そんなとめどもないことを考えつつ家路につく。

明日あたりは、必需品の仕入れと図書館でも探しておくとしよう。借りることはできないだろうけど、読むのは自由なはずだ。考えてみたら、ここが海鳴市であるという事しか知らないし。というか情報収集必要だって、思ってなかったか俺？　思ってたな。

「……駄目だなぁ俺は」

頭をぼりぼり掻いて嘆息。そろそろ痒い。ねぐらを片付けている間、水浴びもしなかったから無理もない事だったが。風呂に入りたい。暖かい風呂に。……いずれドラム管風呂でも作ってやると胸に決意した。

◇

「……なんだよこりゃぁ」

俺は頭を抱えて呻いた。怪しまれようが構わないよもう。あうあうあー。

当座の必需品の買い出しを終えて、寄ったのは図書館。とりあえず手に取ったのは新聞。

人気の少ない席に陣取り、とりあえず読み始めた時だった。

のっけから衝撃がきた。

１９９８年５月２２日（金）という日付である。

こめかみがずきずきする。確かに俺は『俺』であった時の記憶があやふやだが少なくとも２１世紀には入っていたはずだ。ノストラダムスの予言騒ぎで世紀末は騒がれ、２１世紀はテロが横行し、冷戦とは違った意味で物騒な時代に入っていたはず。

過去？　時間遡航？

「ありえん……ありえん……」

何が起きてもおかしくないとは思っていたが、リアル時をかける少女になっちまうとかどんな罰ゲームなんだよ。

とはいえ、呻いていたが、逆に納得できてしまう部分もあった。

それは１００円ショップの品物が妙にこなれていないというか、まるで新しくできた業種のような新鮮さが店に漂っていたこととか。

街行く人たちのファッションだったりとか。

道を走る車の姿だったりとか。

微妙な違和感は感じ取っていたのだ。人との接触を避けていたとしても。

しかし、まあ、なんだ。

もうこの際深く考えるのはやめた方がいいのかもしれない。
時間遡航は不可能とか言われてなかったか？　とか、体が全く違うってことは脳も当然違うはずなのに、なぜ記憶を留めておけるのか？　とか。
今度こそ、今度こそ何が起きても驚かない。驚かないったら驚かないさ。
は・は・は、と妙に乾いた笑いが自分の口から漏れていた。

「はー……」

頭を抱えたままうつむいて大きなため息を一つ。
動揺が思ったより早く収まった事を少し訝しく思ったが、もう考えるのも面倒臭くなってきていた。
ぱらぱらと新聞をめくり読み始める。
おおむね、記憶と違いはない……というか、何年の何月に何が起きたとか、よっぽどの事でもない限り正確に覚えてない。競馬で一当てして大もうけとか、どこかの悪役の二番煎じも思いついたが、それこそスポーツ年鑑でもなければ、思い出せるものではない。上手くはいかないもんだ。

「むう……」

新聞を元に戻し、気分を戻すためにトイレに。
すれ違ったおっさんがぎょっとしていた。失礼な。一応今日は人前に出るので、午前中に服も体も洗ったというのに。臭いか？　臭うのか？
自分で嗅いでみるが判らない。鏡の前に行ったところで理由に気づいたが。

「……ああ、見た目がヤヴァいの忘れてた」

ここのところ人を避けていたというのもあるし、気にしてる余裕もなかったというのもあるが。
そういえば、結構な厨二容姿だった。

「んん？」

鏡を見ていたら、ふと違和感に気付く。
頭頂部から右斜め前にひょろっと触覚のような髪が……

「おお、これが噂に聞くアホ毛というやつか」

鏡みたいに細かく映すものでないと気付かなかった。わしわしと頭をかき混ぜてもひょろっと出てくる。しかし、これはアホい。目をきつくして睨み付けてみる。しかしアホい。俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「すごいな、アホ毛の性能。何というシリアスブレイカー。どんな情景描写でさえ、最後に『アホ毛が静かに揺れた』を加えればギャグ空間にしかならないぞ」

そんな馬鹿な事をぶつぶつ呟いていたら随分と気分転換にはなった。
我ながらアホなことである。

◇

図書館で、食用になるキノコのスケッチや、この辺一帯の地理などをメモっていたら、閉館の時間になってしまった。
途中で司書さんがこちらに気付いたらしく、何か話しかけようと

してくる。逃げ続けたが。
捕まったら、学校のフィールドワークの一環です。とでも言っておこう。欧米人に見える姿だし、勝手に深読みしてくれるだろう。きっと。
まずまず、有意義だった。
ねぐらに戻ってから整理しないといけないが、多分この答えで合ってると思う。

「この世界は『俺』から見てパラレルワールド」

海鳴市という単語に覚えがないのも当然。地図を見たら日本の形が微妙に違っていた。
都道府県の名前も一部聞き慣れないものがある。なんだよ犬上県って。
歴史もちらっと見た程度では判らないものの、何らかに違いは出ているのだろう。
何より、すとんと、面白いように腑に落ちた。
ああ、そりゃ俺の家族も友達も街すらも存在しないのも説明つくわ。

「いや、しかし……波瀾万丈すぎる」

すでにお腹いっぱいです。
小説や漫画の異世界召還された連中はよくこんな状況で頑張れるな。そろそろ俺はへこたれそうだぞ？　なんかもう、リスク考えてもそこらの病院に入って、記憶が変なんですーとか言って保護してもらおっか？　なんて思いついてしまうくらい。そんな愉快な事しないけどね。

「後は、なんでこんな体なのか……だが、それこそ訳判らんよなぁ」

もうそういうもんだと思うしかない。
ともあれ、しばらくは細々と暮らしながら図書館通いの暮らしが続くことになりそうだ。
いずれはまともに戸籍持って、かつてのように小さいながら飯屋でも構えて、人並みに暮らせるようになれれば……いいなぁ。
夕暮れに染まった道を歩きながら、ちょっとばかり黄昏れた。

四話

５月も末に入り、そろそろ気温も高くなりはじめ、同時に雨雲がかかりやすくなった。

流石に何度も何度も落ちている金銭を頼りにするわけにもいかないので、最近では、海沿いの防波堤や磯で釣り客向けに飲み物や弁当、釣り餌を売っている。

朝釣りをする人は多いので、特にかきいれ時でもある。と言っても自分で弁当など作って販売するには許可もいるし何より責任もとれない。早朝からやっている弁当屋さんの弁当を買ってそれを少し高く売るというだけだ。

と言っても、釣り人そのものの数が多いわけではなく、近くに釣り具店がないのも食べていけるほど売れないからだろう。……そんなスキマ産業的な商いだが、平均して一日５００円前後の収益が出るので、有り難い限りではある。もっとも、見た目でちょっと引かれて最初は買って貰えなかったが。今は名物と化している。アメリカでは子供のレモネード販売が社会勉強になっているんだよーとか言っておいたから、そんな小遣い稼ぎ兼社会勉強と思われている可能性は高いが。

実のところ他にも試したこととして、よく聞くアルミや鉄材の収集をしてみたことがある。ホームレスの人たちが空き缶を現金に換えているあれだ。幸いねぐらとなっている廃工場には分解すればいくらでもリサイクル可能な資源がごろごろしている。

ただ、やはり買い取って貰えなかった。それどころか、親は何してやがるんでぇと怒られた。考えてみたら当然だったかもしれない。社会実習とでも言っておいた方がよかったか……。戦後すぐの時代だったら子供でも鉄くず買って貰えたのだろうけどな、残念だった。

さらにもう少し暖かくなれば、砂浜でバーベキューなどする人が増えるだろうから、炭やガスボンベ、足りなくなりがちな調味料な

どの売り歩きもいいかもしれない。
売り歩きの姿を外から見たらかなりシュールだろうけどそれはもう気にしないことにした。気にしてたら生きていけない。
そんな生臭い事をつらつら考えつつコンビニに向かう。今日は弁当はもとより、釣り餌やストックしていた釣り道具も残らず売れたので、収益が大きかったのだ。たまにの贅沢として甘いものを買うというのもいいだろうと思うのだ。……いや、素直に言えば甘いものが異様に美味い。舌も子供化を起こしているのかもしれないが。きまぐれにプリンを食べた時どう表現してよいか迷ってしまうくらい美味かった。不思議なものだ。
一度、ねぐらに戻り、売り歩き用のクーラーボックス、まあ発砲スチロール箱に布を張っただけなんだが、を置いて、近場のコンビニに向かう。
店員に胡散臭げな顔をされながらも買う。ちょっとだけお高い、某なめらかプリンである。先ほどから翼がうずいて仕方がない。感情に反応するとか犬の尻尾か？　そりゃ店員に胡散臭げに見られるというものだ。
どうせなら見晴らしの良い場所で楽しもうと、地図を思い出して、ちょっとした高台の八束神社に向かう途中の事だった。

◇

ネズミ嫌いの猫型ロボットの出てくる国民的アニメ、あれに出てきそうな空き地が通り道にある。そりゃもうザ・空き地！　というくらいに見事な空き地なのだ。工事に入る前に企業が潰れたりでもしたのか、古い建材がちまちま積まれている。定番である土管も見事二段重ねになっている。それがどうなるかというと、近所の子供にとって、十分すぎる遊び場になってしまうのだろう事は想像に難くない。
積まれている建材とか、少し危ないだろうと思って、以前通った

時に見てみたのだが、誰かが既に対処したようで、崩れないように固めてあったりしてあって、無用の心配だった。誰がやったかは知らないが、親御さんの誰かかもしれない。子供の事を見ていないようでよく見ているものだ。

ちなみに、末日である今日は日曜日で、そんな空き地で今日も元気に子供が遊んでいた。微笑ましくなるものの、遊ぶというには少し騒ぎが大きすぎないか？　と思う。

ちらっと覗き込んでみると、どうも空き地の領有権を巡っての小競り合いの最中だった。小競り合いというか喧嘩ごっこというか。一対一でお互いの陣営が人を出して喧嘩してるようだ。……ああ、そういえば今の時代ってＫ１全盛期だったか。ピーター・アーツ、マイク・ベルナルド、アンディ・フグ、アーネスト・ホースト、サム・グレコ。綺羅星のような華のある格闘家が集まっていた時代だ。こちらの世界でも存在するのはスポーツ新聞で確認した。

「おお、ツバサ君だ。ヘルプ頼む！」

ぼーっと思い出にふけっていたら、お声がかかってしまった。見れば、先日ちょっかいをかけてきた二人組の子供に見つかってしまったらしい。めざとい。

確か背の高くてひょろっとしたのが安田で、背は小さいが元気にちょろちょろしてるのが南部だったか。何とはなしに１６００メートル走でも走らせるとよさげな二人だ。

この二人に会ったのは二日前。場所は同じくこの空き地で「おお、ド〇えもんそのままだ」と土管に乗って悦に入っていた時だった。この二人はどうも同年代のリーダー的な存在のようで、自分たちの遊び場である場所に得体のしれない見た目外人の子供が居ることで警戒したのだろう。第一声は「おまえ誰だよ？」だった。多分に攻撃的なものである。

見た目の年は同じくらい。となると、小学校三年生くらいか。ランドセルを背負っているとこを見ると学校の帰りに寄ったようだ。
ちょいちょいと子供扱いしていると何かスイッチが入ったのか「うおーっ」とかチビの方が突進してきたので、がっぷり上手を取ってがぶり寄り、寄り倒し。いや、頭を打たないように手を挟んでる。残った方が慌ててしまって行司の真似事をしてくれなかったのが残念だったが。その後も童心に帰ってしばらく遊んでいたのだ。
思えば、人恋しかったのかもしれない。名前を聞かれた時も、うやむやに誤魔化してさらっと居なくなることもできたのだが……。たとえ、思いつきの名前でも呼んでほしいと思ってしまったのは。
思いついたのは白井ツバサという名前だ。三秒で考えた。ネーミングセンスについては自分でも有り得ないレベルだと思っている。今更だ。……まあ、親が某サッカー少年の漫画が好きだったとでも言えばいいか。

しかし何とも血気盛んと言おうか……この安田と南部のツートップは自分たちの遊び仲間を率いて、上級生と遊び場の権利を賭けて対決しているようだった。聞いてみると相手は二年歳上らしい。体格差もあってなかなか勝てないようだ。聞けば、すでに１０戦連敗。下級生グループは意地と負けん気でやってるようなものらしい。……上級生はそれ遊びとしか思ってないだろ。
ともあれ、ここは混ざって大暴れするのも大人げないので、盛大に大人げない振る舞いをすることにした。大体ヘルプを請われたからには答えねば男が廃るというものだ。身体は……いや何も思うまい。

「先生頼ンますぜっ！」

安田、お前はどこのチンピラだ。犯人はヤスとダイイングメッセージを意味もなく残すぞ。

大暴れと言っても、二人抜けばいいようだ。どうも五人制の勝ち抜きのようで、今のところ二敗一勝のようだし。ルールを考えたやつは空手漫画とかの影響も受けてそうだな。先鋒次鋒とか言ってる。

一人目は奥衿と袖を掴んできた。あれ？　柔道？　おお、綺麗に大外刈りをかけられた。しかも、怪我させないようにこちらを浮かせてる。本当に五年生かこいつ。と言っても、技をかけられてる最中にそんな長考がいけるくらいに余裕でもあるんだが。

相手の軸足に、にょろっと右足を絡めてやるとバランスを崩して倒れる。マウントポジションになってから頬をつまんで引き延ばす。上上下下左右左右とコナミコマンドを引っ張った頬に叩き込んでいるうちに１０カウントが終了。予想外の行動にやられてる方も唖然としていたようだ。勝利。

「うぃなー」

気が抜けそうな勝ちどきなのは勘弁してほしい。真面目にやってたまるか。

二人目の相手もまあ、適当に遊んで勝った。というか体格も小さいのにこの身体はスペックが高すぎる。実は吸血鬼とかいうオチだったりしないよな、と意味もなく犬歯を触ってチェックしてしまったり。

と、そんな感じで自分の身体の不思議を思っている俺を置いて、安田と南部が勝ち誇っているが、どうも雲行きはすんなりと行かないようだ。

俺が二人目に相手したのは、なかなか負けず嫌いだったようで、しかも下級生になどとは……というプライドの高い子だったらしい。こちらも助っ人を呼ばせてもらってもう一戦だ。文句言うなとか言っている。

「いや、俺はそろそろ行こ」

「乗った！　こっちにゃツバサがついてるかんな。簡単にゃ負けないぜ。今までの借りをまとめて返してやらぁ」
「……うかと」

南部くんや、それは虎の威を借るようで男の子としてはどうかと思うぜ？

その台詞を聞いてニヤッとした上級生は取り巻いてる子にその助っ人さんを呼びに行かせた。「クラスメイトの一大事だと言って引っ張ってこい」とか言ってるが、これってそんな一大事だったのか？

うんまあ、小学生の思考回路はさすがによくわからん。

待ってる間、暇なのでダレていたら、さすが小学三年生、安田と南部も含めて持ってきていたサッカーボールで遊びはじめてしまった。先ほどの柔道やってたぽい五年生の子もそうだったが、運動神経の良いのが多いようだ。輪になってリフティングをしながらパス回しをしているようなのだが、上手い上手い。単純にサッカー勝負でもすれば上級生に勝てたんじゃないか？　と思ってしまう。

そんな様子をぼーっと見ながら、いい天気だなーと土管の上でへたれていたら、どうやらその上級生の助っ人が到着したらしい。着いて、様子を一別するなりとても帰りたそうにしていたが。

「……で、どんな一大事だって？」

無表情だ。子供ながらにして精悍さを感じさせる顔というのは珍しいかもしれない。そんな顔でぼそっと呼び出した上級生に聞いていた。

なにやら、その上級生が拝んで頼むよーとか言っているが、まあうん、呼び出された方としてはいい気分ではないわな。「話にならん。帰る」とか言っている。

何となくその無愛想な子に軽く同情していたのだが。こちらも早くプリンにありつきたいので、帰るなら帰るでよしなのだが。

「おー！　ネクラ女の兄貴なんて敵じゃねえよ！　とっとと帰れ帰れ」

空気の読めない事に定評のある南部がとても燃えやすい燃料を投下した。

先の一言と共に空気が軽く凍り付いた事にも気付いていない。パネェ。

「……そのネクラ女とは美由希の事を言ってるのか？」

「おう。あんたあの高町美由希の兄貴だろ？」

同じクラスなんだぜ！　とか言ってるが、駄目だこいつ。早く何とかしないと。空気の読み方と人様の家族を悪く言っちゃいけませんと言っておいた方がいいのか。

なんだかその無愛想な、ええと、美由希ちゃんの兄？　が、ゆらぁりと向き直る。

「気が変わった。受けよう」

「よ、よっしゃ、頼むぜ先生！」

安田、声が震えているぞ。そして押し出すな。

なんと言うか、うん。勝っても負けても南部には謝らせるとしよう。子供のうちだからこそ、直しておかないと……。放置しておくとこれからも舌禍を引き起こしそうだ。

俺が押し出されると、訝しげな顔をされた。視線は南部に注がれている。……ああ、南部が相手だと思ってたんだな。

ちょいちょいと肩を叩き、声をかけるとする。

「あー、その。気持ちは判るんだけど、相手は俺なんだ。すまない」
「……そうか」
どうもげんなりしたようだ。
ああ、言ってみればお互い巻き込まれたもの同士だな。
「高町恭也だ。……上級生を二人とも下したと聞いている。何か武道でもやっているのかもしれないが、こちらも古武術を少々嗜む身だ。遠慮なく来るといい」
この人はこの人で本当に小学五年なのだろうか？　いや身長や体格はそれっぽいが、口調とか言動が老けすぎだろう。嗜むとか同世代が言われても判らないんじゃないか？
というか歩いても体がまったくぶれていない。武術とか程遠い俺でも判るくらいにぶれていない。こう言うのを隙がないと言えばいいのだろうか。
「一応、白井ツバサだ。よ、よろしく？」
名乗りとか知らんのでとりあえず片手をあげてよろしくしてみる。なんだかさらにやる気をそいでしまったようだが、仕方ない。こちとら、格闘技なんて学校の授業以外でやったこともないのだ。相撲や総合格闘技など見るのは好きだったが。
結果からすると負けた。かなりあっさりと。……だがなんだろうこれは。
目の前で高町恭也が頭を下げている。
「知らなかったとはいえ、すまん」

とか言ってる。微妙に顔が赤くなっているが。低学年に頭下げる羞恥心か？

いや、本当に頭下げられる覚えがないんだが。なんだろう。

んー、確か流れは……

開始から投げ技か腕を取りにきたので避けてたら、何か蹴りだの何だのと飛んできて、それでも頑張って避けてたら、ニヤァとか楽しそうに笑ってあばばばば（形容不可）な事になってきたので、あれだ、足を払いにいったのだが、股ぐらを掬われてそのまま投げられた？

「ああいや、謝られる理由もないんだけど、さっきの技って掬投げ？」

「よく知ってるな、小柄な相手には有効なんだ」

ちなみに、古流の場合後ろから睾丸を握り潰して硬直させて投げられるようにも作られている。とか聞かされた時には股間がひゅんとなった。今はないけど。

「つか、なんだ？　高町、さんの異様な強さは。武術嗜んだってレベルじゃないだろ？」

「幼い頃からやってたからな。立てるか？」

そりゃ立てるが、いや驚いた。この世界には武術の達人の小学五年がいるらしい。一応今のスペック、蠅を箸で捕まえて宮本武蔵ごっことか出来るんだが、それでも目が追いつかないスピードって何？

いや何というか……

「世の中広いもんだな……」

独白はため息と共に吐き出された。

とりあえずは、このすげーすげーと騒ぐ南部に一言物申しておくか。謝っておくようにと。
その後は何だか、先の立ち会いで毒を抜かれたらしく、上級生グループが時間を置いて場所を使うということで落ち着いた。てか、エアガンを皆持っていたとこを見ると、ここを射撃場とするつもりだったらしい。丸く収まったところで、そろそろ行くとしよう。ちょっと関わったつもりが、一時間ほども過ぎていたようだった。……あ、プリンがぬるまってそうだ。
おざなりにじゃーなーと声をかけて、神社へ向かうことにしよう。

◇

「……お？」
「む？」
「高町、さんもこっちに用事か？」

……言いづらいなら名前で呼んでもらっていい、と言われた。なら俺の事もツバサと呼んでおいてくれと言い、改めて名前で呼ばさせてもらう。小学生に敬語つけて呼ぶのは、こう……何ともむずむずするものがあったのだ。見た目年上とはいえ。
その恭也だが、どうもこれから鍛錬だと言うときに呼び出されたらしく、奇しくも行き先が同じだった。八束神社である。しかし、日曜の朝方から何やってるんだ、とも言いたいような。余り覚えちゃいないが『俺』がこのくらいの時は日曜に限らず遊び回っていたような……口を出すべき筋合いでもないけど。
ぽつぽつと時折会話をしながら、のんびり歩く。
どうもこの恭也という奴は沈黙が嫌いではないタイプのようだ。無口というのともちょっと違うようだが、無愛想……というのも最初の印象だけだったな。判りにくいだけで。同道していると少しは判る。車が近づいてきたらさりげに車線に近い方に動いているし、

向かいから自転車などが来れば、自分が半歩先に進んで避けさせる。年下の引率は慣れているという風情でもある。
何にせよ、そう子供子供した精神なわけでもないようで、どんな生き方したらこうなるのかは判らないが、付き合いやすくはあった。
ただ、趣味で最近盆栽に手を出していると聞いた時はリアクションに困ったが。ある程度成熟というよりこいつ中身、老成してないか？
時期が時期なので、道ばたのハマナスの紅色を愛で、アジサイもぼちぼち見頃ですなあなどと話しながら歩く。
『はまなすの丘を後にし旅つづく』の句を思い出して、旅情そそられるものでもあるな、などと話し合い……
いかん、つられた。老人の寄り合いのような会話になってしまった。小学生にして何という爺むささか。しかも片方は明らかに日本人離れした外見。シュールにも程がある。

「用事は終わった、恭ちゃん？　……えぁ、だ、誰？」

神社の階段を登り終えると広い境内が見え、女の子の声が降ってきた。
ああ、しょうもない用事だったよ、と言いながら女の子に近づく恭也。ああ、どうやらこの子が妹の、みゆきだっけ？　南部が言っていたネクラ子ちゃんか。
ちょっと失礼な事を考えながら見ていると、……別にネクラという風にも思えないが、人見知りの傾向はあるようだ。恭也の後ろにそそくさと隠れてしまった。頭の後ろでまとめている三つ編みがひょこひょこと恭也の陰から出ている。何ともその小動物めいた動きにほんわかしてくる。恭也はいつもの事らしく一つ苦笑してから言った。
「先の話にも出てきたが、妹の美由希だ。そういえば……聞いてい

なかったが同年代くらいじゃないか？」

年齢１０歳くらいに見えるので、あながち間違いじゃない。肯定すると、あごに指を当ててしばし考え、妹と仲良くしてやって欲しい。と言い、少し離れてアップを始めた。これはあれか、後は若いものでごゆっくり。という奴なのだろうか？

高町美由希はおろおろしている。突然の事態に混乱しているようだ。

俺は恭也の計らいに感謝をささげつつ、初々しくうろたえている美由希の膝の後ろと頭の後ろに手を伸ばし抱きかかえ。片手で挨拶をする。

「じゃあ恭也、また後日」

「人の妹をナチュラルにさらうな」

「……ちっ」

そこはまあ、冗談だったので普通におろすが。ちょっとお持ち帰りしたいと思ったのは秘密だ。

しかしなんだろうか、ロリペドからは遠く離れた趣味だったはずなのだが、子供子供した仕草がこれほど可愛く見えるとは……。いや、思えば空き地の子供の時もそうだったか。むう……保護欲求というものだろうか？

……ああ、投げっぱなしの冗談の後に放置してしまった。なんだかやるせなさそうにこちらを見ている。視線が痛かった。

とりあえず、定型通りに何のひねりもなく自己紹介と挨拶を交わした。他愛もない話を振ってみたりしているとさすがに緊張も解けてきたのか、普通に話してくれるようになったが。

そういえばいつ知り合ったのかと聞かれて、つい先程だよと言った時は信じられないようなものを見る目で見られた。さらにはこの一言である。

「…あ…あの、ぶっきらぼうな人だけど悪い人じゃないから、恭ちゃんをよろしくお願いしたくて。剣と家族の事ばかりで男友達が今まで誰もいなくて……ええ、と、その」

言葉が思いつかなくなったのだろう、次第にごにょごにょと言葉が小さくなっていく。しかし、言いたい事は判った。天を仰ぎたくなった。妹に心配されてんぞ恭也くんや。……というか判りやすいな、兄は妹を心配して妹は兄を心配してって、既にして相思相愛じゃないか。砂糖吐くぞ。

一つだけ判ったのは、この二人どっちも友達少ないらしい。ん……？

「剣？」

さらっと流してしまったが、古武術とか言ってなかったっけ？

見れば同じく「？」を顔に浮かべて首をかしげている美由希。

「別に隠すつもりでもなかったんだが、うちの流派の中心は小太刀だからな」

アップを終えた恭也が近づいてきて解説してくれた。何でも家で伝えられている古い流派なんだとか。使う武器の事はぼかしていたものの、一種類って事でもなさそうだ。しかし、小太刀二刀ねえ、何というか……

「忍者にしか思えん」

「俺もたまに思う」

思ってるんかい。

「ただ、国家資格を取れるほど忍者らしい訳ではないな。やはりあくまでもうちのは武術だ」

あるんかい国家資格。なんだかこちらの世界にびっくりである。実はこの世界の連中って、背中の翼程度じゃ驚きもしなかったりするんじゃないだろうな。必死こいて隠してるのが馬鹿馬鹿しくなってくるぞそれは。

……と、大分話し込んでしまっていたな。美由希ちゃんも兄を待ってるようだし頃合いだろう。

「長々と話しちゃったな、鍛錬があるんだろ？　そろそろ邪魔にならないとこにでも行っとくよ」

「む、そうか。ところでツバサは神社に用事でもあったのか？」

「おお！　プリンを見晴らしの良い所で食べようと思ってね」

何とも言えない微妙な表情を浮かべた二人を残し、景観の良い場所を求めて散策を始めるのだった。

五話

「う……ぬるまったぃ……が、美味い」

さすがのこだわりプリン。冷たさが無くなっても濃厚な卵とクリームのコク、ほどけるような舌触りは健在だ。

八束神社の境内はそれ自体が一つの小山の上に設けられている。本殿の造りの割に土地はかなり広く、それは先程まで話していた高町兄妹が鍛錬をできるだけのスペースがあるという事からも判る。

その境内の端、ちょっとした崖になっていて、落下防止の柵があり、そこからは海鳴市と海岸線が一望できる。３０年は経っているだろうなかなかの大きさの楓がその風景に彩りを添え、秋頃、紅葉でも始まればさぞかし映えることだろう。

そんな絶景を眺めながらの甘味はなかなかもって良いものである。この子供舌になって一番嬉しい部分かもしれない。

ゆっくり味わいながら食べ終わり、余韻を楽しむ。遠く聞こえるホトトギスの鳴き声が一層風情豊かなものにしてくれるようだ。

「うし、充電完了」

身体はあまり疲れを感じないが、精神的な疲れは別なのだ。メリハリをつけて休まないと保たない。

今日は朝方から人と接する機会が多く、それなりにストレスになっていたようだった。

「しばらく人と没交渉だったからなー」

独り言をつぶやきながら神社の入り口の方にゆっくりと歩く。

日を見るにまだ正午には達していないようだが、１０時から１１

時といったところだろうか。正午を回ったところでサンドイッチ屋でパンの耳でも仕入れようと思っていたのだが、まだ、少々時間があるようだった。

「おー、やってるやってる」

境内の本殿よりちょっと離れた場所。木々に囲まれた少し平地になっている場所で、高町兄妹は鍛錬を行っているようだった。

少し茶目っ気を刺激され、気配を消して、息を殺しながら近づいてみる。

ちなみに、この技術にはかなり自信がある。アホ親父に幼少期よりサバゲーに連れ出され、いかに大人に見つからないようにするかを突き詰めた結果、かくれんぼの達人と化してしまっていたのだ。

それに今の身体のスペックが加わると、誇張表現なしでとんでもないことになる。と言ってもこのように障害物がある場所限定だが。……何分、この真っ白い肌と髪と目は目立ち過ぎる。

と、それなりに近づくことに成功してしまった。二人はまだ気付いていないようで、今は型稽古をしているようだった。小太刀二刀と言っていたように二尺あまりの木刀を使って、ゆるゆると型をなぞり、攻めたかと思えば守り、隙を作り、誘い込み、一刺しを与える。

ゆっくりした動きとは裏腹に二人の顔は真剣そのもので、見ているだけでこちらも緊張してしまいそうだった。

その一巡の動作が終わると、また同じ構えに戻り――速っ！

同じ動作の攻めから守り、隙を作ってからの誘い込み、そこからのカウンターまでの一連の動作を先程のゆっくりとした動きから一転していきなり凄まじい早さで繰り返す。

出すほうも出すほうだが、受けるほうも受けるほうか。

若干小学三年生の子供がそれを型通りに捌いてみせるとは誰も思わないだろう。大体、あんだけゆっくりした動きに慣らされれば、

急激な速度の変化に動体視力が追いつかない。というか脳が追いつかない。なんというかとんでも剣術だなこりゃ……

「ん、これで今日の分は終わりだ。上達したな美由希」

「ふへぇー」

どうも終わりらしい、何やら恭也はトレーニング帳？　を取り出してメモをしている。美由希はへたりこんで肩で息をしているようだ。

「お疲れさま、随分ハードな鍛錬だな」

「うんー、でも伸びてるっていう、実感があるからねー……ってえええ！　いつからそこにっ」

木に引っかけてあったタオルを美由希に渡してやると盛大に驚かれた。ああ、こらこら、驚くのはいいが鼻水が出てる。タオルの端で拭いてやる。

「いや、ゆらゆらと型稽古してるあたりから？」

「気付かなかった……」

そりゃ、野生の鳥にも気付かせないから。

さらに、ここのところ隠し事が多いのでこそこそしていたらさらにかくれんぼスキルが上がった気がする。今ならスネークになれる。

「でもすごい隠れ身だね。恭ちゃんは気付いた？」

「む、いや……」

何やら恭也は思案気にしている。考え込むとこいつ全く感情が読めなくなるんだな。仏頂面もいいところだ。

考えがまとまったようで、こちらを真っ直ぐに見て言った。
「少し立ち会ってくれないか？」
「あー、いい……よ？」
あれ、適当に返事してしまったが。
立ち会い？

◇

何というかどうしてこうなった。
あの後、木刀を一振り渡され、お互い一刀の状態で打ち合ってみるとか。
何考えているのか判らん。打ち合い稽古は竹刀じゃなかったか？
とりあえず、やるだけやってみるかと、見よう見真似で振り回してみる。全く当たらん。当然か。あのとんでも剣術を納めている以上、素人の振った剣など丸見えだろうな。
ただ、恭也の方で相当加減しているのか、こちらも一応は全て避けることが出来ているんだが。
「ッ！」
１０合も打ち合ったり、かわしたりしたところだったか。
何を思ったか、俺が思い切り振った袈裟懸けの下で下から打ち合おうとしていた木刀を落とした、って危なッ！
体重を乗せた一撃を振り下ろしているのを、無理矢理腕の力で止める。痛てててててて！　攣る！
「うぉぉ、あーぶなかったぁ……」

恭也の頭上１０センチ位のところで木刀は止まっていた。冷や汗がどっと出る。
腕攣ったが。
しかしこいつぁ……
「何やってんだよ……幾ら何でも危なすぎだろ？」
俺の馬鹿力で振られた木刀だ。幾ら素人の大振りといっても、当たったら洒落にならない。
非難した目で見ていると、目を落として幾分かすまなさそうな声で言った。
「……まず、済まなかった。試すような真似をしてしまった事を詫びる」
「はぇ？　試す？」
アホ声が出ちまったじゃないか。アホ毛に続いて「はぇ」とか「ほぇ」とか言いだしたらとてつもなく末期だと思うので、そういう妙な事を唐突に言わないで欲しいものだった。
んー、しかしまあ、なんか真面目な目ぇしてるし。とりあえずは。
「聞こうか」
「ああ、全てを話す訳にはいかないが」
わざわざ、そんな言う必要もない前置きを入れる恭也にがっくりと肩を落とす。真面目なのはいいんだが、融通効かないんだな。
まあ、なんだ。一通り聞いたところによると、要するに、割と二人の流派は敵が多いのでそれなりに日常も警戒している所に、何故か妙な運動能力もった外国の子供が絡んできたので、敵味方定かならず、剣で試してみよう。というトンデモ理論だったらしい。最後

の恭也が木刀を落とした瞬間に少し殺気でも混じれば、敵だと判ったそうだ。殺気感じ取れるとか……いや、そうだな、まだこいつも老成してるものの小学五年生だった。そりゃ殺気くらい感じるよな。

「あー、なんだ。とりあえず第三の目とかは開眼しないようにな？」

「？」

「いや、判らなければいいんだ……ともあれ、理由があんなら気にするなよ。俺は気にしない」

と言っても、真面目で堅物なこやつはどうも申し訳ないとでも思っているようなので……

『じゃあさ、友達にでもなってくれよ。それでチャラな』……嘘だ。そんな甘酸っぱい少年漫画的のエコーがかかるような台詞を吐くはずもなく。案外面白かったから、剣の基本でも教えろ。とでもごねて納得させる。高町家のトンデモ剣術じゃない方でな、とは言っておいたが。……いや、流石にさっきの立ち会いで文字通り子供扱いされたのがなんともかんとも。うん、くやしいのかもしれない。別にどんな奴にも勝ちたいという程、勝負事に執着はないが、あそこまで軽く扱われると、時にはそういう気分にもなる。というか、先程の無防備に見えた状態でもあいつ悠々と避けられたらしい。腕攣らせて止めた俺は涙目である。

そんなごたごたしてるうちに正午のサイレンが海鳴市に響き渡った。焼きたてパンの耳を狙っている身としてはそろそろ行かなくてはならない。

名残惜しげに「ツバサくんまた明日くる？」とか聞いてくる美由希ちゃんに癒された。普段は早朝にやっている鍛錬らしいので、それに合わせて来ることにして別れる。

天気は残念ながらそろそろ雨が落ちそう、ただ心はほっこりしていた。

◇

昼食は香ばしい焼きたてパン耳を山で採れたキノコのスープと共に頂く。ハーブ類もかなり入っている。最近では種がどこからか運ばれたものか、野にも自生しているものが多いので助かった。

ぽつぽつと屋根から音が聞こえてきた。

どうやら雨らしい。やれやれと腰を上げると、外に干してあった魚を回収して屋内に入れる。若干生臭くなるが、こればかりは仕方ない。

それなりに本降りになりそうなので、今日は山に出るのは諦める。低い山だからといって雨で視界の悪い中、山歩きなど好んでするものではない。

そうなると、唐突に暇になってしまった。

食料のストックはまだあるし、必死こいて修繕したおかげで、生活環境もそれなりに整っている。

ぼーっと音のするトタン屋根を見上げているのも飽きたので、雨がやむまで燻製でも作ることにする。

やり方は簡易に作るなら至極単純だ。ある程度の熱に耐えられる密閉容器があればその中で魚なり肉なりを燻せばいい。乱暴な言い方ではあるものの、そういうものなのだから仕方ない。

ということで使うのはどこにでも手に入る段ボールである。幸いダルマストーブという便利なものがあるので、排煙管を途中で外して穴を開けたダンボールに直結すれば簡易スモーカーの完成だ。間にブロックを挟んで熱で燃えないようにはしてある。温度管理はさすがに適当になるが。ひとまず、先程回収した干しておいた川魚をダンボール内に吊り下げる。

スモークウッドを買っていたわけでもなかったので、薪として集めておいた木の中からナラっぽい木を選んで火を入れる。煙が目的なので、最初に熾火を作ってからは少量ずつ足すのみに留める。

もちろん、作業は全て小屋の外。小屋の屋根を延長した形でトタン屋根をつぎはぎ延長して、柱で補強。少し盛り土をして簡単な屋根付きテラスのようにしてある。本格的な梅雨前にやっておいて良かった。屋内でダルマストーブを調理用で使うこともできるが、これからの時期は暑くてかなわないし、一応土間に竈でも作る気になればできるが、換気扇などついていないのだ。あるいは天窓でも設けない限り煙たくて困る。

煙で燻している間に、ついでの仕込みということで、血抜きをしておいたキジバト――よく朝方にホーホーポッポーとリズミカルに鳴く鳥だ。見つけたので石を投げたら見事に落ちた。それの下ごしらえでもしておく。羽根をむしってからストーブとは別に設置してある竈の火で炙り、残った毛を焼く。ワタを抜いてから水で洗う。手羽と足、胸とモモあたりに手早く解体して塩水に漬けて臭み抜き。ガラはこのまま鍋にかけてスープを取ることにする。

香味として公園に生えていた月桂樹の葉を数枚、ネギの代わりのノビル、山椒の葉を投入して竈にかけておく。

切り取った手羽先は塩胡椒を振り、切れ目をいれてセリの葉をダイレクトに突っ込んで、尖らせた木の枝に刺して竈の火の近くに立てて置く。まあ、ただのおやつ代わりの焼き鳥だ。

こうして料理をしていると以前の仕事を思い出してやはり楽しくなってきてしまう。料理というものを余り上品なものにしたくなくて、店ができた時もわざと飯屋■■なんてつけて、メニューも和洋中なんでもござれなんてのにするから、出だしは大変なもんだった。伝票管理なんぞも考えないで見切り発車なんてするから■■には大分迷惑を……

「いづづ……」

こめかみを揉む。記憶のあいまいな部分を頑張って思いだそうとすると、脳味噌が反乱を起こすかのように頭痛が起こるようだ。…

…むう、脳に痛覚って無いんじゃなかったか？
さすがにもう泣き喚きなどはしないが、やはり少々落ち込むものはある。

「せっかくの良い気分に水差しちまったなぁ」

背中の翼も心もち垂れてしまったようだ。ちなみに今は隠す必要もないので、背中に穴を開けたTシャツなどを着たりしている。……ふと思ったが、今の姿で鳥の手羽に齧り付くとか、かなりシュールなのかもしれない。共食い？　気にすることなく食うが。
考え事をしてる間に、ほどよく焼けた手羽の肉厚の部分に噛みつく。外はカリカリ、中からセリの香りと混じった濃厚な野鳥の肉汁が溢れる。やはり焼き鳥はブロイラーより野鳥の方が味が濃くて美味い。何とも至福である。といっても一串なのであっという間に食べきってしまったのだが。
そんな事をしているうちに辺りも暗くなってきた。鳥人間（笑）にも関わらず夜目が利くので、月明かりでもあれば夜もあまり不自由はしなかったのだが、さすがにこれだけ雲がかかってしまうと夜になれば、まるで見えなくなってしまう。蝋燭に火を灯す。ただ、そう無限にあるものでもないので、やはり今日は早く寝ることにしよう。江戸時代のような、日が昇れば起き、日が暮れれば寝る生活なんてものを自分がやるとは思わなかったが……妙なおかしみを感じながらぼんやりと雨音を聞き、夜は更けていった。

◇

「基本は両手共に小指で握り、他の指で支えることだ」
とのことらしい。何かと言えば刀の握り方とのことだ。言われた通りに握っているのだが、もっと柔らかく握れとのことである。添

え手は鶏の卵を握るつもりでとか、すっぽ抜けない？
足運びも含め、何度かやり直しを食らいながら、形になってきたら、とりあえずはそれで素振りを倒れて立ち上がれなく程度にやれとのこと。
スパルタじゃね？　とこぼしたところ、恭也と美由希に「何いってんだこいつ」的な不思議な顔をされた。そのくらいは当たり前らしい。恐ろしや。
ごちゃごちゃと何をやっているかというと、先日ちょっと口に出した、剣の基礎を教えてくれという約束の事だ。こいつはあれか、俺様が教える以上は生半可で済ませるつもりはないとかそういう奴なのだろうか？
これを使えとか言って渡されたのは鉄芯入りの木刀。出所を聞くと口を濁していたがどこから持ってきたのか……小太刀二刀の練習では使わないであろう長さ、そしてずっしりと重みがある。

「それをまともに振るえるようになれば三尺の野太刀が振るえるようになる」

こいつは俺を侍にでも仕上げるつもりなのだろうか？　並の同年代の子供の力だと１０回も素振りすれば腕上がらないんじゃないだろうか。
ただ、このチョイスも理由があってのことだったらしく、俺の一番相性が良さそうな剣を考えたらそうなったということらしい。
単純に力と速さがある分、小手先の技に頼らないで『一の太刀を疑わず』の示現流のような方針で鍛えるのが良いそうだ。かけ声はちぇりおーとでも言えばいいのか？
……いや文句を言う気はないし、そこまで考えてくれたのは有り難いが、剣の基本という話はどこに飛んでいった……？
「考えてみれば俺も美由希も他流を使える練習相手は居なかったか

らな。楽しみなことだ」

物騒な事が口から漏れてますよ……聞こえなかった事にしよう。なんだこのドラゴン〇ールの住人のような小学五年生は。なんだ、今更だが、割と関わってしまうといけないような人物だったのか？

「……ええ、と。ね、いっしょに頑張ろう？」

多少申し訳なさそうに、でも同年代の仲間が出来たのがそれなりに嬉しいのか、ゆるっとした笑顔を覗かせた美由希の顔はかなりの癒しになったのだった。衝動的にお持ち帰りしそうになり、恭也に物理的な突っ込みをかまされたのは言うまでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7834x/

道行き見えないトリッパー

2011年10月28日07時12分発行